

# 白金



SHIROGANE YOSHI



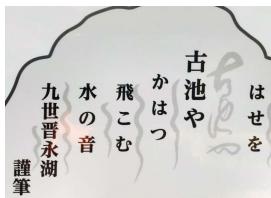
春の祭典（北原一成）



暗夜行路鑑賞会

|   |    |        |         |
|---|----|--------|---------|
| 漢 | 張  | 先      | 人詠其孝友光緝 |
| 初 | 姓  | 春秋嘉其聲績 | 姬       |
| 趙 | 王  | 是賴晉大夫  | 中興      |
| 景 | 張可 |        | 是賴      |

文化院奨励賞（宮村幸次）



芭蕉句碑説明板



同句碑（清澄庭園内）



松の雪吊



園の大泉水の浮寝鴨

冬川の芥に黄なるもの蜜柑  
何ならむ枯野に一つ穴あきて  
竹百幹撓ひて北風を通しけり  
糠床の天地を返し神無月

令和7年（2025）



冬林檎

|    |           |     |
|----|-----------|-----|
| 璃子 | （穴まどひ平21） | 高志選 |
| 〃  | （〃）       | 〃   |
| 〃  | （〃）       | みち選 |
| 〃  | （〃）       | 〃   |

12月号

170号

定例句会（一月の兼題…新年一般）

一月十六日（金）通信句会ライン投句  
二月二十日（金）アビスター第五会議室

121.14までに

三月二十日（金）アビスター第五会議室  
十二月句会（'25.12.19兼題…師走、柚子）太字は当日句

光成高志

燕雀の子らが拾へる木の実かな

冬満月調整池を巡りたる

鈴生りの林檎放置の師走かな

花壇ありアネモネボルト花咲ける

徐々に徐々に柚子の色付く我が狭庭

鈴懸の鈴の鈴生りプラタナス

光みち

猫畦え靴下履けと師走入り

夕闇の庭に点々柚子の数

枝ものゝ柚子食卓に活けてあり

池巡りいたるところに石蕗の花

風立てば細波眩し浮寝鴨

冬至南瓜ひとり三切づつ皿に

浅野正美

柚子の皮傷つけて香を湯に浸す

山茶花の散るや坂道別れの日

木の葉散る日差しは優し献盃す

茶碗蒸し柚子皮けずりそつとのせ

師走なるやり残したる事多し

来年のカレンダー届く師走前

ここにあり色なき庭に石蕗の花

佐々木由紀子

ゆずの香にほつとしている昨日今日

ゆずの香のかほる湯舟にゆつたりと

今日はまたゆずの香かほる湯舟かな

ゆずの香に染まつてしまふ宵の風呂

先生もみんなも一緒師走かな

柚子の香のどこまでもある朝の道

山尾万世遊

夙の街は無口の人ばかり

師走を敗うて魚板の黒さかな

柚子の村こそこそ話す人ばかり

夙や亀甲しるき松の幹

北風の舞い込む蔵の明かり窓

170号選句一覧 ○字は選著の頭文字。

黒塗りは特選

猫畦え靴下履けと師走入り

柚子の皮傷つけて香を湯に浸す

ゆずの香にほつとしている昨日今日

ゆず燕雀の子らが拾へる木の実かな

師走を敗つて魚板の黒さかな

柚子の香のどこまである朝の道

由高山茶花の散るや坂道別れの日

山茶花の散る坂道を歩く永訣の日であった。正美さんの弟さんを

悼む句です。私は宮沢賢治の無苦勵哭の詩を思つた。とほくへいつて

しまつたわたくしのおとうとよ。

正高ゆずの香のかほる湯舟にゆつたりと

冬至の柚子湯にくつろぐはつこりする氣分が伝わります。

冬満月調整池を巡りたる

由風の街は無口の人ばかり

由高ここにあり色なき庭に石路の花

正高枝ものゝ柚子食卓に活けてあり

ゆ木の葉散る日差しは優し歎益す

今日はまたゆずの香かほる湯舟かな

由正鈴生りの林檎放置の師走かな

柚子のむらここそ話す人ばかり

冬至南瓜ひとり三切づつ皿に

料亭で出された氣の利いた料理のようです。柚子の皮を削つてない

由正池巡りいたるところに石蕗の花

ゆの廻師走なるやり残したる事多し  
ゆずの香に染まつてしまふ宵の風呂  
ゆの廻由風や亀甲しるき松の幹

ゆの花壇ありアネモネボルト花咲ける

廻風立てば細波弦し浮寝鷗

来年のカレンダー届く師走前

先生もみんなも一緒に師走かな

正徐々に徐々に柚子の色付く我が狭庭

北風の舞い込む歳の明かり窓

正鈴懸の鈴の鈴生りプラタナス

芭蕉の軽み以後 (120)

おくのほそ道の本文は次には、日光の文が来るのでは

あるが、前回に仏五左衛門と宮城野の画工加右衛門と

福井の章における等裁について私の思いを小林秀雄

の陸沈という言葉を使って書いたので、蛇足序にここ

を敷衍して書いてみる。今朝は5時に目覚めたが、

二度寝を決め込み寝ようとしたのだが頭はさえてゐて、

この両士の事を書き残した芭蕉の心を想像して、はた

と思いついたのが、もののあはれを知ること、

その面影を芭蕉は掴んで残したのでは、いやきっとそ

うに違ひないと思つて起きた。最近の私は脳味噌が縮

んできたのか物忘れがひどくなつてきたので、急いで机上の日記帳に浮かんできたことを箇条書きにした。

光成高志

その一が既述のこと、二が源氏物語の心を本居宣長が論語の君子欺くべしと解釈した源氏と玉鬘の物語論、三が小林秀雄の講演録、その本のこと、四が現代はもののはれを知らぬ人の何と多いことか、米国大統領の米国での閣議で皆が皆大統領を持ち上げる言葉を吐いていること、恥ずかしくないのか、と言うことの四つをメモして今パソコン前にいる。さて蛇足が甚だしいが、これは今は大切なことだと気付いたので思いつくまま書き残そう。その一の既述のことは、先月号に書いた加右衛門といい、二人の人物は世俗のなかでも意地をはることなく、市中に隠れながらもいささかの風雅の誠を貫いて爽やかに生きている。自我意識を捨てて、ありのまま生きようとする没我の姿勢、これは陸に沈む生き方であるということ。そのような生き方がものののはれを知った人のころばえであろうということ。それを具体的に評釈したのが、本居宣長のものののはれ論である。高三の教科書（国語三高国昭和35年度用）にも部分的には載っていたが、当時の私はなんのことやらわからなかつた。ぼろぼろになつた教科書を今読んでみるとこれは小林秀雄の「本居宣長」にも取り上げられている源氏物語玉の小櫛の一節であつた。例えば物語とはどのようなことを書いたものであるというところの原文の一部は次のよ

うである。「さて、物語はものののはれを知るを目指はしたるに、その筋にいたりては、儒仏の教へには背けることも多きぞかし。そはまづ人の情の、物に感ずる事には、善悪邪正さまざまある中に、ことわりにたがへる事には、感ずまじきわざなれども、情は、われながらわが心にもまかせぬことありて、おのづからしおびがたきふしありて、感ずる事あるものなり。」次に「ものののはれを知るといふ事、まづすべてあれといふは、もと見るもの聞くもの触るる事に、心の感じていづる嘆きの声にて、今のことばにも、「ああ」といひ、「はれ」といふこれなり。たとへば月花を見て感じて、「ああ、みごとな花ぢや。」「はれ、よい月かな。」などといふ。「のはれ」といふは、この「ああ」と「はれ」との重なりたる物にて、漢文に「嗚呼おこ」などある文字を「ああ」と訓むもこれなり。（中略）また後の世には「のはれ」といふに、「哀」の字を書きて、ただ悲哀の意とのみ思ふめれど、「のはれ」は悲哀にかぎらず。うれしきにも、おもしろきにも、樂しきにも、をかしきにも、すべて「ああ、はれ」と思はるるは、みな「のはれ」なり。されば「のはれにをかしく」とも、「のはれにうれしく」ともつらねていへり。そは、をかしきにもうれしきにも、「ああ、はれ」と感じたるを、「のはれに」とはいへるなり。

ただしまだ、「をかしき」「うれしき」などと、「あはれ」とをむかへていへること多かるは、人の情のさまざまに感ずる中に、うれしき事おもしろき事などには、感ずること深からず。ただ悲しき事、憂き事、恋しき事など、すべて心に思うにかなはぬ筋には、感ずる事こよなく深きわざなるがゆゑに、しか深き方をとりわけても、「あはれ」といへるなり。俗に悲哀のみいふも、その心ばへなり。」精読すれば大変やさしく丁寧に書かれていることがわかる。句作するにもこのようなこころばへ心の様子、風情を持つて「ああ、はれ」॥「あはれ」と感動することが出発になるのだから、この宣長の文章を参考にすべしと思う。以下は小林秀雄著の本居宣長上(平成19年二刷)を引用して書いた。CD講演録にもとり上げられ面白くやさしくユーモアを交えて喋られている。さて、「ものゝあはれ」の用例は「土佐日記」まで遡る。鹿児<sub>か</sub>この崎を船出しようとして、人々、歌を詠みかわし、別れを惜しむなかに、「楫とり、ものゝあはれも知らず、おのれし酒をくらひつれば」とあるその用法で、貫之が示しかつたのは「ものゝあはれ」と呼べば、歌の心得ある人は、誰も納得すると彼が信じた、歌に本来備わる一種の情趣である。貫之の「古今集」序は「人磨なくなりたれど、歌の事、とどまれるかな」という自信に溢れた、れ

歌の価値や伝統に関する、わが国最初の整理された文章である。宣長は「ものゝあはれ」論を書く起點として、これを選んだ。「古今序に、やまと歌は、ひとつ心を、たねとして、万よろずのことのはとぞ、なれりける、とある。此のこゝろといふがすなはち物のあはれをする心なり。次に、世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を、みる物きく物につけて、いひだせる也、とある。此の心に思ふ事といふも、又すなはち、物のはれをしる心也。」(「石上私淑言いそのかみさまめごと」卷二) 講演録によると、歌人にとって物のあはれという言葉は長い間使われて来て、當時だれも格別な注意を払わなくなつた極く普通のことばだった。宣長はこれを普通の日本人の言葉にしなければならないと気づいた。歌人だけに通用するのはけしからんと思つたと講演している。宣長は、この言葉の持つ表現性の絶対的な力をはつきり知覚して驚くのである。勝手な思い付きを陳べるのではない。宣長自身の云うところを聞いた方がいいだろう。(つづく)

## 俳文広場

- ① 続曾孫 ひ孫がやつて來た。十月中旬まだ暑さの続く中、生後四ヶ月の女児が新幹線の長旅は大変だったことだろう。ようやく本人に逢えた、しつかり抱きしめる。じつと見つめてくる。だれ? ひばあちやんだよ、

はじめまして、深い血のつながりに想いを馳せ引き寄せられるようになつかりと抱きしめる。遠い所へよく来ててくれたね。この家族を生きる場所に選んでくれたのだね。柔らかな温かい肌の感触、桃のような甘い匂い、清らかに澄んだ瞳、キューートな声、息づかいここに居るよ！と精一杯存在感を表現してくる。そのあどけない無防備さは護つてあげなければ・と血が騒ぐ。タブレットの中の映像だけでは感じ取れなかつたすべてがじわぐと温かく満たされてゆく。家族皆で四ヶ月のお祝い膳を囲み赤ちゃんを迎えた幸せを分かちあつた。三日間一緒に過ごした。福山市北部の四川ダムのある山の上にポツンと一軒ある人気カレー屋さんまで皆でドライブもした。もう少し行くと姫谷地区の山の中にある木々の緑と真っ青な空、山々の尾根が遠くまで見渡せる。澄んだ空気を満喫した。朝九時到着。すでに若い客が大勢開店を待っていた。オートバイでツーリングのグループも立ち寄りびっくりする程賑やかなカレー屋さんだ。赤ちゃんは車窓から次々と変わる風景をキラキラの瞳で見ていた。ドライブたのしめたかな。こちらに居る間にも物をしつかりつかもるようになりもう少しで頑張っている寝返りも出来ることだろう。「清らかな心でどんな時も自分らしくまつすぐに歩んでほしい。周囲に希望を与えるられる、

光輝く存在になつてほしい」彼女の名前に込められた両親の願いを一身に受け大きく育つてね。いよくお別れの時がきた。赤ちゃんは車のチャイルドシートに納まつて満面の笑顔だ。目まぐるしく変化していくこれから時代、困難を乗り越えてたくましく優しく育つてほしいと願う。成人した姿を見たい！厚かましくもそう願う。ひばあちゃんの思いは尽きません。帰京して十日程経つた。親子三人の日常が動画で届いた。赤ちゃんのウグーアグーのかけ声と共に寝返りの出来た瞬間の映像だ。おめでとう！すごい！がんばったね！と一斉にラインが盛り上がる。背中を優しく押し、上手に導くママもすごい！ありがとう。大きなパワーを頂いています。次に会える時を楽しみにしていますよ。（11.15 廣本幸恵）。

② ポプラの葉 札幌の友がマンションを買ったので泊りに来よとメールが入る。逡巡としたが秋の学会に出る時泊めてもらう。北大の裏に当たるそのマンションから朝は地下鉄で夕は徒歩で通つた。丁度、台風十六号が日本海を北上してオホーツク海へ抜けた日である。会場の皆は飛行機が飛ぶか飛ばないかやきもきして早めに千歳へ向う。私はゆつたり最後まで席を立たなかつた。発表会が終ると会場を出て構内を北上した。雨はあがり風に木々が揺れている。武道館のとこ

ろまで来ると樹間の空に虹が懸かつた。須臾にして、二重の虹になる。武道館の円屋根と重なつて三重の円弧になつた。碁盤目通を斜めに切る道を北上すると、道際の土という土に秋明菊が咲いている。二十四条通りに出るとポプラがさわさわ揺れている。よく見るとポプラの葉がめくれて白く、べらべらと揺れている。台風圈にある証しである。一時狂つたように白くめくれめぐれて葉が細かく揺れる。ポプラの葉は葉柄が長いので僅かの風でも感知するのである。手賀沼縁にも十本あつたが、危険ということで伐られてしまつた。八海山のゴンドラの下の斜面にもポプラが數本あって、こちらは若木であつた。ポプラの葉の揺れに風を感じつつ蕨狩りをしたことがあつた。時間潰しにコーヒーを飲んでいると、ケータイが鳴つて吾に返つた(成高志 04.9)。

**③白鳥の来る村** 私が四十年住んでいる我孫子市には手賀沼が横たわりその先に干拓田が広がつています。手賀沼から第二手賀沼へそして利根川へと続く徒歩では三四十分かかるので夫に車で連れて行つてもらいます。一昨年まで餌付けをする人がいたので白鳥は人によく慣れており、人の姿をみると一斉に

先陣を競う如く私の足元までやつてきます。私は悦に入つて殿様気分で迎えます。でも餌を持つていないとわかるとがつかりした表情をします。「ごめんなさい」の連発です。瘤白鳥の他に鶴と百合鷗がおり、その数は白鳥より多く白と黒のコントラストがおもしろい。大きな争いのないのは水鳥同士の仲間意識があるからでしようか。鳴き声は百合鷗が一番賑やかです。瘤白鳥は時に羽搏き二メートルほどの大ききな姿となり威厳があります。又、白鳥は会話の素振りをする時、長い首を上下に大きく曲げる動作をします。その他にお尻振りもあり見ていて飽きません。しばらく佇んでいると冷たい川風に耐えきれず、遠富士を見ながら帰宅の途につきます(光みち 19.1)。

**④「利根の川風袂に入れて♪ベンベン」とか「♪あれをご覧と指さす方に♪」とか、昔何度も聞き、自分で口ずさんでいましたが、それ以上何のことか知りません。戦前生まれの私の子供のころの情報空間は、現在では考えられない程貧弱で、ラジオや黎明期のテレビの情報がほぼすべて、しかも受動的情報だったですから、今のようにインターネットで調べるとか、AIに聞いてみるとか夢にも思わず、「ああそう」というだけで話は進まないので。向田邦子の随筆に、「シ**

ユーベルトの『野ばら』の一節『童は見たり野中の薔薇』というところを『夜中の薔薇』と覚えていた」という話があります。私たちの世代では、情報欠乏症に起因するこれに似た話は山ほどあるのでしよう。さて、

先日「潮来笠」をインターネットで調べていると、江戸時代後期天保年間に「大利根河原の決闘」なる事件が勃発したことを知りました。利根川の潮来の対岸すこし下流に下総・笛川という土地があつて、ここを本拠とするヤクザの親分・笛川繁蔵と今の旭市を本拠とする同じく飯岡助五郎とが長年争っていました。もしかしたら潮来の伊太郎も、実在したとしたらこの騒乱に巻き込まれたのかも知れません。これに笛川方の用心棒・侍上がりの平手造酒ひらてみきが絡んだ話が、江戸期以来何度も講談や浪曲で演じられてきましたし、私も確かに、浪曲か講談で聞いた気がします。冒頭書いた一節は浪曲「天保水滸伝」の出だし、後の一節は田端義夫の「大利根月夜」の出だしで、共にこの事件を歌つたものでした。なるほど。この歳になつてやつと話の辻棲があつてきました。私は千葉県柏市に住んでいますが、笛川にしろ旭にしろ銚子や犬吠埼に行く途中通り過ぎたところでそんな歴史があるなど全く考えたこともありませんでした。江戸時代、銚子は相当栄えていたのでしょうかし、江戸時代に大規模干拓をした

「干潟八万石」を南北に挟んだ、笛川と旭はそれ相応に栄えていたのでしょうか。時間を取つてゆっくりまわつて見たいものです（<sup>12,15</sup> 広谷豊史）。

### お便り広場

光成様いつもありがとうございます。めつきり寒くなりましたね。169号20部をお送り致します。今年もあと一ヶ月とは驚きです。午年なので馬齢を重ねていますが来年で一回り成長したいなあ。みちさんによろしくです（<sup>11,25</sup> 木戸敦子）。（敦子さん！私も午年。来年は年男。貴女は年女。）璃子さんの169号の手紙のつづき：○とにかく虫ざらいの私が好きなのはカマキリとヤモリ、イモリ、トカゲ、カナヘビ、クモです。その他もろく甲虫とかコガネ虫とかチヨウ、トンボはきらいこわい。何でか解りません。今言葉ならチヨウきらいはなめくじ、見るのもいや、鉢底にいると身ぶるいです。○行つたことなし、今後将来行けないであろう地方の話、とても楽しいです。ハクビシンこの所沢にも居ます。URが昔の公団住宅であった頃、家の台所の窓を開けたら居ました。お互いにびっくりもせず立ち去りました。狸も大かと思つたら居ました。庭には蛙も居ましたつけ。その連中を住居の回りで見ることもなくなり、所沢と言つても広うござんすで、里芋農家や畑作つてゐる農業地帶には居るのではないでしようか。子供の頃の夏休みは「田舎へ行く」と云う子供達がうらやましく東京生まれ東京育ち

つてつまらないと思つたものです。父が夏休みにお台場へ海水浴に連れていくつてくれたのも、子供に対するお義理だつたように思います。大正生まれの私も廻りに地方生まれの子ども達が居ましたから、今若い芸能人達が地方出身多数で十代で上京したりと聞くと感心します。私の田舎についてのあこがれは食物もいくつかの中のひとつです。テレビで見る大きな食卓をかこんで大皿にいくつもの料理、それも土地の野菜ふんだんに煮物魚とか東京で見ない量でああ云う雰囲気で食べてみたいと思います。故郷の風景いいですね。今我家の玄関先に大輪菊小菊色さまざま咲き揃っています。知人が趣味で一年がかりで作りわざく毎年飾つて下さいます。一茶も江戸時代から明治にかけて菊作りが流行つた頃に作つたらしく品評会のようなものにして入賞しなかつたのでしょうか、次の句笑つちやいます。

「貧菊をひとり見直すゆふべかな」（一茶）。貧菊とはね！

最近カタカナ言葉など（皆様方はご存知かも）

・人名

サニブラウン・アブドラ・ハキーム（スポーツ）

ホリコムジヤック和写（NHKアナウンサー）

武村ラシッド（村武かも）（ハーフド選手）

井戸アビゲイル風果（スポーツ選手）

中島ジョセフ佐氣（ナイジエリア）（リリ）

八村（ハチムラ）（バスケットボール選手）などく。

・外来植物、動物　バイカルハナウド（猛毒白い花）

ナガエツルノゲイトウ（水の中池？川？いもりとかげに似て卵のようなものが見えている）

見なれぬものにはさわるのはNG。

・スポーツ　モルツク　フィンランド発祥のニュースポーツ。数字の書かれた木のピンを木の棒を投げて倒し得点を競う。

わら半紙　ちなみにこの紙はワラバンシと云いました。

廃用症候群の私ヨタケが進みメモ見たいな書きものです。

よろしければ取捨選択でお願い申し上げます。・日本で一番偉い人の言葉でアチコチ問題が起きていますね（何かあれば中国の反応早いですね）・食料品の高いのを何とかしよう

と思つてもお米券なんて戦中戦後のお米の配給手帳思い出してすぐ一ついやです。あの暑さはどこへやら、これから寒さに文句を云うことでしょう。インフルエンザワクチンしました。なさいましたか？毎日をお大切に。（11.18 瑞穂子）

（やうやく打ち終わりました。縦横無尽、自由自在、融通無碍に書かれまして大変面白く入稿しました。今月の手紙を次に打ちます。）

令和七年何と早く師走になつたのでしよう。私みたいな寝ている病人でない病人なのに気忙しくもあり、ほんとうに忙しくもあります。今日はヘルパーさんにお線香を先週買つてきてもらう件につき注意ありでした。先週買つてきた時何も云わずあれはヘルパー（介護保険）では買つてはいけないものであつた由、ローソク、仏花その他いろいろく

ある由、仕事についたときそのような注意勉教あつたかと聞いたらあつた由。(クリーニング屋への出し入れもダメ)本人身体関連以外は受けられぬと。ローソク、線香などは自費でと口をすべらせました。買い物のお金は全部支払つているので、あやまつてもらいたい。と大ファンガイです。四十五分で湯殿とキソチン床そうちで今日は終了。私ありがとう連発。お耳の汚れこれまででごめんなさい。昨日から来年分今日納める予定でしたので、①に行くにつき、一寸初冬のごあいさつと思いこんなことになりました。お許し下さい。記 令和八年一月～十二月一年分 白金霞会員費用 壱万五千円也納入いたしますので、多忙中ながら、高配下さいますようお願いいたします。十一月号貢数増え手ざわり厚く読むのも大変、表紙の「草笛の丘の赤松」すばらしく「赤松の幹や小春の空に映え」。毎日でも見たい美しさです。師走、格別お一方様のご健勝をお祈りします。光成 高志様みち様

(12.4 瑞子)

急な寒波に見舞われ大雪のニュースに驚いています。お変わりありませんか。「白金霞」十一月号をお送り頂きありがとうございました。表紙の写真に見覚えのある名前、三原捷宏さんの絵が載つていて高校時代のアルバムを取り出しあの頃のあれこれを懐かしく思い出しました。三原さん日展入選おめでとうございます。高校時代からずっと絵画を続けておられたのですね。素晴らしいです。光成さんは日展会場に足を運ばれたのですね。良かったですね。光成さんは高三の時は同じクラスだったこともアルバムで改めて認識しました。光成さんの俳文「我孫子の落日」これこそ俳文なるものを示して頂き色々学ばせてもらうことがかりです。刻々と移り変わる景色、注意深い視点適切な表現の仕方、勉強させて頂きました。がとても難しいという事も分かりました。私達が何げなく見えている部分を見逃がさずしつかり觀察し豊かな表現は一朝一夕で出来るごとではありません。文に引き込まれてしまいます。句誌は“季節感 生活感を共有する場”という言葉にひかれ、曾孫の続編を書いてみたくなりお送りさせて頂きました。よろしくお願ひいたします。寒さに向かいます。どうぞご自愛ください。かしこ令和七年十二月七日 廣本幸恵。前略もう十二月になつて十日も過ぎてしましました。仲間コロナに感染し一週間閉じ籠つていきました。昨日からようやく出勤しました。長く生きると色々な景色を見る事が出来ます。食事を作つて二階の下に置き電話との話たいへんでした。その間同級生の一人メールでやりとりをしている友達からのメールが来ました。曾孫の幼稚園のカバンを作つているとの事すばらしい。私はボタン一つ付けるのも針に糸を通して時間がつぶれもう何も出来ないと思う方が先です。時代の進歩について行けない自分でも若い人達に良く話す日本人で良かった。良い時代を生きて來たと。現代の人達

はこれから未来良いようで礼儀も言葉使いも作法も世界的になつて来てその中で生きて行くのは私達からしたらいいへんのような気がします。みんな誰でも幸福である世の中でありたいものです。無理をせずお身体大切にがんばつて下さい。寒がりの高志さん風邪に気を付けてね。敏子さん高志さんとの事よろしくお願ひします（<sup>12</sup><sub>10</sub> 幸子）。（幸子

姉さん毎月の手紙ありがとうございます。健兄もよく手紙を下さいました。兄から聞いたのですが、母は電車で隣り合わせになつた誰にでもすぐ話しかけて仲良くなつてしまふ。それは姉さんも同じですね。それから、最後の方の書きぶりは理屈です。もうすぐ<sup>103</sup>歳になられるこのお便り広場の長屋璃子さんの手紙を毎月載せていますので、よく読んで下さい。これが毎日の生活であつて生きて行くといふことはこういふことよくわかるでしょう。日々の些事（こまかい何でもないこと）を書きとめるだけで十分です高志。）今月の投句送信します。当日句を含め 6 句送信してしまいました（<sup>12</sup><sub>14</sub> 正美）。拝復、多忙の中俳誌代金領収書お送り下さりましてありがとうございます。又、得難い手賀沼の野鳥カレンダー 6 句岳しく岳しく頂き御礼申し上げます。一〇一五年も頂き一年樂しませて頂きました。一〇二六のダイサギとオシドリだけ他は違う鳥達で二年続きで沢山の鳥達に会えました。ミサゴは猛禽ですが、とても大きいツバサですね。十一か月分の二年分の野の

鳥周囲の風景とてもマッチして行けないのにわくわきました。この二三日急に寒くなりました。お風邪感染症お気をつけて下さいね。来年のご来駕を楽しみに頑張らなければと思つています。お一方様に佳き年が訪れますよう願つております。草々（<sup>12</sup><sub>17</sub> 璃子）。

#### 我孫子日記

|    |          |
|----|----------|
|    | 11/21    |
| *  | 句会       |
|    | 11/25    |
| *  | 墨絵       |
|    | 12/5     |
| *2 | 駅前クリニック  |
|    | 12/7     |
| *3 | 長沼林檎園    |
|    | 12/9     |
|    | ウエブのチェック |
|    | 12/10    |
|    | 暗夜行路鑑賞   |
|    | 12/12    |
| *4 | 清澄庭園     |
|    | 12/19    |
|    | 句会       |

\*<sup>1</sup> 燕雀の子らが來てゐる落葉哉  
\*<sup>2</sup> 冬晴や千葉ニユータウン高層群  
\*<sup>3</sup> りんご園ドラム缶にて諸を焼く  
文化おなばけより剪定婦人來てゐたり

林檎園隣り合わせに大根畑  
冬林檎接木の枝の地に着ける  
冬林檎今年の枝の林立す

枝にあり齧る痕ある冬林檎（みち）  
獲り切れず林檎は枝に師走入り（〃）  
青空や放置されたる冬林檎（〃）  
背に日受け焼芋焼いてゐる翁（〃）

\*<sup>4</sup> 柏紅葉石造迦楼羅像の前

一陣の風が冬日の水を刷く

真鴨立ち同心円の水輪生む

雪吊や早くも松の芯立つて

雪吊の遊び盛んに揺れてをり

岸の松此處も菰巻きされて立つ

鵜島あり青鷺ばかり日向ぼこ

寒風や紀州青石そり立つ

冬紅葉縮れて古池やの句碑

梅擬楠の傍ら紅凝らす

ネパール人混み合ふ電車十二月

(みち)

柏紅葉こんなところに迦樓羅像

(みち)

一陣の風に流され鴨浮寝(ハリ)

細波の眩しき泉水冬うらゝ(ハリ)

雪吊の風に搖るゝは美しき(ハリ)

青空や雪吊の松向ふ岸(ハリ)

鯉の池銀杏黄葉の流れゆく(ハリ)

記念樹の松の輝く師走かな(ハリ)

菰巻の結び目美はしき石の庭(ハリ)

白鷺の石から石へ遠ざかる(ハリ)

水鉢に銀杏黄葉の満ちてをり(ハリ)

夙や芭蕉の句碑の横たはる(ハリ)

後ろから冬日の当たる芭蕉句碑(ハリ)

## 編集後記

今月号がようやくここまで来た。畏友広谷さんの強力な助けがあり、この170号までpdfファイルが揃った。来年春は創刊から15年経つので記念号を刊行予定です。書籍にしなくてもWEBにアップ<sup>掲載</sup>するので誰でも見られます。これがウエブの効果です。スマホでも読めるので便利なのだが、対面でおしゃべりするのもこういう世の中では貴重なことです。一期一会という言葉も日本の文化です。私は両方大切に思っています。

若い時からコンピューターアレルギーという人を見てきましたが、そろばん計算尺を使いまくった昔を思えば大変便利になつたと思います。ガリ版刷の冊子も今は懐かしく思います。<sup>2025</sup>年もあと一週間残すのみ、これから賀状版画にかかります。良いお年をという暇もありません。

|        |               |                            |              |                                 |
|--------|---------------|----------------------------|--------------|---------------------------------|
| 白金葭    | 12月号          | (通巻170号)                   | 誌代一部千五百円     | (年会費一万五千円)                      |
| 郵便振込口座 | 一〇五二〇一四二二三六一  | 名義シロガ                      | ネヨシ令和七       |                                 |
| 年      | 12月           | 21日                        | 発行編集発行人      | 光成高志発行所                         |
| 木      | 2<br>14<br>17 | 光成方                        | 投句先・メール又はライン | 270-1119 我孫子市南新                 |
|        |               |                            |              | 印刷製本・喜怒哀楽書房                     |
|        |               |                            |              | 〒950-0801 新潟市東区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊 |
| 三 &    | 12月           | の白金葭&墨絵&暗夜行路&宮村さんの書&芭蕉句碑&雪 |              |                                 |
|        |               |                            |              | 吊&清澄庭園大泉水&冬林檎&璃子さんの句集「穴まどひ」よりの選 |